

研究報告

教員養成課程大学生の死生観に関する検討 —童話 100 万回生きたねこを教材として—

藤野彰子

1. はじめに

医療職者の死生観は、職務を遂行する上で重要な意味をなし、その形成については基礎教育からの十分な関わりが必要とされている。特に看護師は、人生の終焉を迎える時期にある患者や家族に寄り添い、死との対峙において必要な支援を行わなければならない。しかしながら、死に対する考え方が未熟である者は、対象者と十分に向き合えず、適切な関わりが困難となることや、終末期看護に対して混乱や燃えつき状態に陥る場合がある。

このような状況を受け、近年、看護学生に対する「死に対する考え方」への教育は様々な工夫がなされ、実習や遺族による講演等、教育媒体の検証もすすめられている。それぞれ一定の効果が報告されているが、共通の示唆として得られていることは、“死について考える機会を増やすこと”にあり、早期からの意図的な介入が重要であるとされている。

そこで、本研究では、講義資料に絵本を教育媒体として導入することにより、死をどうとらえるかを考える機会とし、看護実践において、終末期の患者のそばに寄り添うケアができるような看護基礎教育に活かしていくこととする。

研究対象者として、臨地実習前の看護系大学在学中の3年次生、及び看護専門学校在学中の2年次生、教育学部教員養成課程履修中の大学生を対象者とすることで、相違比較を実施し、看護基礎教育に特化した示唆を得ることとする。

筆者らは、すでに看護大学、看護専門学校での検討は行っており¹⁾²⁾本論文では、このうちの教育学部教員養成課程履修中の大学生

を対象とした調査について検討し、看護教育を受けている学生との比較を行う。

2. 目的

講義資料に絵本を教育媒体として導入することにより、死について考える機会とする教育技法について検討し、『看護基礎教育への示唆を得ることを目的とする。

3. 研究方法

1) 研究デザイン：仮説検証型研究デザイン

2) 介入方法

①近年の死に関する動向や特徴に関する講義を90分行う。

②『100万回生きたねこ』：佐野洋子，講談社 を数名のグループで読み合わせ、各自の感想を話しあう。その後全体のディスカッションを行う。

3) 介入効果の測定

講義や絵本の内容、グループディスカッションを通して感じた死に関する自らの気持ちを200～300字程度の文章にする。

4) 分析方法

対象者が記述した文章をデータとして分析を行う。記述された文章を「死をどう捉えるのか」の視点からコード化し、意味内容の類似性を分類し抽象化しカテゴリーを抽出する。

5) 調査期間

平成24年1月

4. 倫理的配慮

東京慈恵会医科大学倫理委員会の承認を得た。同意を得る方法は、講義を受けた学生に対し、講義終了時に口頭にて研究の趣旨を説

明し、感想文の記入を依頼する。感想文は無記名であり、成績とは関係ないことを説明する。感想文の提出を持って研究参加の意思確認とする。回収ボックスを用意しその中に投入する。研究者はその場にはいないで、1 時間後に回収する。

5 . 結果

1) 対象

調査対象は、A 公立大学教育学部教員養成課程履修中の大学生 23 名 (回収率 100%)

2) 分析結果

64 コード 9 サブカテゴリー 5 カテゴリーを抽出した。「」はコードである。

5 つのカテゴリーは、以下に示す通りである。

Category1 生きる意味や死ぬことについて考える機会となる

Category2 人とのつながりの中で生きて死ぬ

Category3 死はまだ考えられない

Category4 死は怖い

Category5 死を考えるためのよい教材

以下にカテゴリーごとに記述する (表 1)

1. Category1: 生きること死ぬことについて考える機会となる

Subcategory: 死について話し合うことができ有意義だった

「初めて他の人と死ぬこと生きることについて話し合った気がします。今回はとてもよい機会を与えてもらった」

「自分の死について深く考えさせられ他の人の意見からも刺激を受けた」

「自分の死というもの、大切な人の死というものを深く考えることができた」

Subcategory: 生きる意味を見つけると死が受け入れられる

「死の話しをしていると生の話しになり、どう死ぬかはどう生きるかであり、ひとりひ

とりの課題である」

「死について考えるということは、自分の生きかたについて考えることであり、死について考えることから目を背けないようにしなければならない」

「猫は初めて自分以外に興味を持ち、自分以外を大切にすることができ、後悔のない人生が送れた」

Subcategory: 納得した生きかたをすると安らかに死ぬことができる

「自分らしく生きて死ぬということは私にとっては自分の思うように生き、自分の生き方に満足し、安らかに死ぬことである」

「今自分の死のためにできることは毎日を一生懸命後悔なく生きること、周りの人にしっかりと感謝の気持ちを伝えていくこと」

「自分の納得できる死に方を選んで穏やかな気持ちになって死にたい」

「自分らしく死ぬ」ことは「自分らしく生きる」ことであり、その「自分」をまずは知る必要があるのではないか

2. Category2: 人とのつながりの中で生きて死ぬ

Subcategory: 家族に囲まれて死にたい、看取りたい

「死ぬ時は、家族が一緒ならどこでもいいので自分の好きな人たちに囲まれて幸せな気持ちで死にたい」

「家族と話し合って、穏やかな気持ちで死を迎えられるようにしたい」

Subcategory: 人は回りに人がいるから生きられる

「ねこを失った人々が嘆き悲しむ様子が描かれているように、人はひとりで生きているわけではない。周りにはたくさんの人々がいて、その人たちがいるから生きていくことができる」

「後悔のない充実した人生が送れるよう、今自分が生きる環境、仲間を大切に生きていこうと思う

3. Category3: 死はまだ考えられない

Subcategory: 死はまだ遠くイメージできない

「死に関する話は基本的にテレビの中であり、どうしても自分から遠い話のように感じる」

「なかなか自分が死ぬときのことは想像ができなくて、具体的にどういう死に方をしたいか答えがみつけれなかった」

『死』というものが、現実視できないことから本を読んだだけでは、議論自体が上手く進まなかった」

4. Category4: 死は怖い

Subcategory: 死は喪失である

「孤独で人生はどうでもいいと思っている人間のほうが死ぬのは簡単だと思う」

「突然死なれるとただごっそりと何か喪失した感覚に襲われるだけな時もある」

Subcategory: 死は怖い

「死に対する恐怖は、子どものころ大きかった。死んだ後の世界はどうなっているか、自分というものが無くなってしまうのか不安だった」

「死については考えたことがない、または怖いから考えないようにしている

「結局私たちはまだまだ生きたい年齢なので、どう死のうと嫌なのかもしれない」

5. Category5: 死を考えるためのよい教材

Subcategory: この童話は死を考えるためのよい教材である

『死』というテーマをいかに子どもたちに理解してもらえるか考えたとき、「100万回生

きたねこ」を題材にすることは良いと思います」

『死』というテーマをいかに子どもたちに理解してもらえるか考えたとき、「100万回生きたねこ」を題材にすることは良い」

考察

1. 死について考えることは生について考えることである

死について話しあう機会は日常ではそうたびたびあることではない。また日常的に死に関することがらは、意図的に隠されてきている現代社会の特徴がある。1985年までは、自宅で生まれ自宅で看取ることが多く、3)それ以降は出産も看取りも病院で実施されるようになった。これはまさに国民皆保険の制定の時期に一致する。自宅で最期を迎えることで死にゆく過程を、家族で看取ることができ、残された家族ひとりひとりが、生きることと死ぬことを日常の暮らしの中から自然と考える機会となっていた。この営みが、病院へ移行したことから、死がますます隠蔽され重いテーマのことがらから目を背けて生きていく社会となった。このような時代において、大学生は死について考え、語り合う機会は皆無に近いであろう。また核家族の増加により、祖父母の死も、同居したことのない関係の浅い人々となり、悲しむ程度も少なくなり、生と死を深く考える機会となり得なくなった。

このような状況のなかで、死について語り合う機会を授業に取り入れることは大変意義のあることである。今回のディスカッションを通して、生きる意味をみつけると死がうけいられ、死について逃げないで考えることができ、後悔のない人生を送ることができれば死を受け入れやすくなることを学び、死を考えることは、積極的に生をみつめて日々の暮らしをすることであるということに気づくことができた。

さらに人は他の人とのつながりの中で生きて死ぬのであり、とくに家族などの好きな人々に囲まれて最期を迎えることができれば、おだやかな死が迎えられるという、自らのことだけではなく、自分を取り巻く人々のことを含めて考えることができた。今回の授業は死について考える機会となり有意義であったとあってよいと思われる。

2. 死に対する恐怖感とその心理的サポート

「死にたいする恐怖を子供のころから持っている」という考え「怖いので考えないようにしている」という考えがある。青年期の学生が死を怖いものと考えていても成長過程においては当然と思われるので、死に対する恐怖感を持つことを、支持していくことが重要である。また怖いという感情とは異なり「死についてイメージできない」という学生もいる。これらの学生についても、死を考える機会であったこの授業は、死とは何かを考えることができこれからの生きかたに何らかの参考になるものと思われる。

看護を学んだ学生も死に対する恐怖感を持っている³⁾が、未知のものへの恐怖はたとえ看護を学んだ学生にも存在するものである。

またこの恐怖感を持つ看護学生が、受け持ち患者の死に出会うとき、死に対する気持ちを抑圧し、または罪悪感にとらわれることが考えられる。このような場合には、学生の気持ちに共感し、支持することで一歩前に踏み出し患者や家族に寄り添うことが出来る。

死というものへの恐怖感を持ちつつも、生前から苦しみをそばで見ながらできるだけ安楽になるよう看護をしてきた人ならば、目の前の人が一人称の個として存在し、恐怖ではなくなり、一人の人としてみる事が出来るようになる。死に逝く人々は残されたものへたくさんエネルギーを与えてくれる⁵⁾。

死に対する恐怖感を持っていても、終末期

の患者や家族に対し「患者や家族に寄り添い支えたい」と自らの感情に引き込まれないで看護したいという姿勢がみられた。しかし一方で、死が怖いので、どのように接していいかわからないとしたものもあり、学生はアンビバレンツな感情を持っている。

このようなことを考慮しながら臨地実習では、学生の気持ちをよく聞き、学生のその時々心理状態を肯定的に受け止めサポートをする必要がある。感情が昂ぶり泣くこともあるが、家族とともに悲しむならばなんら止めることはない。

看護を学ぶ学生の方が死に対する恐怖感を持っているものが多かった。当初、一般の大学生のほうが多いのではないかと仮定したが、逆のデータとなった。この結果から、看護を学ぶことは死を考える機会が多く、より具体的な情報が得られ死を身近に考えることから恐怖感を持つものが多いと考えられる。

3. 死を考えるためのよい教材

死を考えるためのよい教材である」との評価があり、死を考える授業の導入としては評価できる。何もない所で死について討論をするよう促しても議論が進まない。今回のように議論のきっかけとなる童話の導入は教育方法として効果があるものと思われる。

緩和ケア病棟での患者と死について話し合う材料として童話を用い患者の心情を引き出すことができたと報告されている⁵⁾。

本研究でも童話を使った議論の導入は、効果的であることが明らかになった。

どの本がよいか等の検証では、『はっばのフレディ』との比較検討では、こちらは淡々とした内容で、学生に衝撃を与えるエピソードが少ないので、大学生のグループワークには、今回選択した童話の方が適している。今後はさらにふさわしい童話や動画をも検討

することが必要である。

今後の課題としては、今回の大学生での研究結果を参考にして、看護基礎教育の学生が、よりよい終末期の看護ができるよう看護教育の改善に励みたい。

参考文献

- 1) 務台理恵子、藤野彰子:看護専門学校における死生観の形成に関する検討—童話 100 万回いきたねこを教材として. 日本看護学教育学会第 24 回学術集会. 千葉. 2014 年. [日本看護学教育学会誌第 24 巻 p. 224]
- 2) 藤野彰子、務台理恵子:看護大学生におけ

る死生観の形成に関する検討—童話 100 万回いきたねこを教材として. 日本看護学教育学会第 24 回学術集会. 千葉. 2014 年. [日本看護学教育学会誌第 24 巻 p. 225]

3) 梅田恵、射場典子:緩和ケア. 南江堂 2011.

4) 前傾 2) と同じ

5) 藤野彰子:死に逝くものからの贈り物. 獨協医科大学看護学部最終講義資料. 2015.

6) 鈴木美千代、森礼子、渡辺富子他:がん終末期における絵本読み語りによる患者家族の感情の表出を促す援助. 第 39 回 成人看護Ⅱ. 2008

表1 大学生の死に対する捉え方

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード例
生きること 死ぬことについて考える機会となる	死について話し合うことができ有意義だった	13	8 滅多に話すトピックでもなかったのでこの場で話し合いができて良かった
	生きる意味を見つけると死がうけいられる	13	31 猫は初めて自分の人生を愛せたことで、満足して死ねたのだと考えた。自分のことも愛し、他人のことも愛したことで、気持ちが満たされ、死ねた
	納得した生き方をする と安らかに死ぬことができる	11	40 自分の納得できる死に方を選んで穏やかな気持ちになって死にたい
人との繋がりの中で生きて死ぬ	家族に囲まれて死にたい、または看取りたい	5	25 死ぬ時は、家族と一緒にならどこでもいいので自分の好きな人たちに囲まれて幸せな気持ちで死にたい
	人は回りに人がいるから生きられる	6	45 後悔のない充実した人生が送れるよう、今自分が生きる環境、仲間を大切に生きていこうと思う
死はまだ考えられない	死はまだ遠くイメージできない	5	11 なかなか自分が死ぬときのことは想像ができなくて、具体的にどういふ死に方をしたいか答えがみつけれなかった。
死は怖い	死は喪失である	5	32 孤独で人生はどうでもいいと思っている人間のほうが死ぬのは簡単だと思う
	死ぬことは怖い	3	6 死について考えたことがない。まだ全員二十歳前後ということで、まだ先のことだから考えない、または怖いから考えないようにしているのではないかと思います。
死を考えるためのよい教材	この童話は死を考えるためのよい教材である	3	48『死』というテーマをいかに子どもたちに理解してもらえるか考えたとき、「100万回生きたねこ」を題材にすることは良いと思います。